

「つれづれ」とは何か・補説

川平, 敏文
九州大学大学院 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/4776874>

出版情報 : 語文研究. 130/131, pp.249-263, 2021-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

「つれづれ」とは何か・補説

川 平 敏 文

はじめに

先には、小著『徒然草 無常観を超えた魅力』（中公新書、二〇二〇年）第一章ならびに終章において、『徒然草』序段における「つれづれ」の意味、およびそれが後代どのように解釈されつつ、現代に至ったのかについて考えてみた（以下「前稿」と称する）。

これら二章は、小著のなかでも、準備・考察・執筆に最も時間を費やした章である。しかし「新書」ということもあって、先行研究の紹介を割愛したり、用例の数を大幅に削減したり、論証の過程を省略したりといった操作を加える必要があり、学術論文として見るならば、やや説明不足の点があっ

たことは否めない。そこで本稿では、それらの問題について補説しておくこととした。

一 先行研究の問題点

「つれづれ」とは何か。

もはや自明とも思われるこの問いについて、私がいま一度考えてみようと思ったきっかけは、十七世紀の徒然草注釈書の記述にあった。

『徒然草』序段の「つれづれ」とはどんな意味かと問われれば、多くの人は「所在ない」「手持ち無沙汰だ」などといった「退屈」系の意味を答えるだろう。しかし近世の注釈書には、「さびしい」とか「閑寂だ」とかいった説明が書かれている。

「退屈」と「さびしい」とでは、若干ニュアンスが異なる。前者は「することがなくて倦み困じている」という感じであり、後者は「独りぼっちで悶々としている」という感じである。どちらにしても、好んでそうありたいとは思わないマイナスの状態であるが、「閑寂だ」となるともつと違ってくる。それは、隠者が愛し楽しむような、価値としてはむしろプラスの状態であるとさえいえるだろう。現代一般的な「退屈」説とは違う、このような解釈の違いがなぜ生じたのか。「つれづれ」という言葉の意味を、もう一度さかのぼって考えてみる必要を感じたのであった。

この問題については、すでに先行するいくつかの議論が存在していた。それを紹介するためには、近代における「つれづれ」の語義解釈の歴史について、若干の説明を加えておかなければならない。

「つれづれ」の語義については、明治二十年代と昭和四十年代までのあいだに、おおまかに二つの意見が生まれ、対立していた。一つは、明治二十年代の鈴木弘恭に発する「退屈」説。もう一つは、大正期の島津久基に発する「新・静寂の境地」説。そして昭和四十年代に、安良岡康作・井手恒雄らが、後者を批判する形で前者を支持し、それ以後は「退屈」説が

主流となり、現代まで続いている。このあたりの流れは、前稿（終章）をお読みいただきたい。

ところで、こうした議論に別の観点から一石を投じたのが、藤田加代「つれづれ」考（『高知女子大國文』第五号、一九六九年）であった。藤田は、勅撰集や『源氏物語』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』などを検討し、「つれづれ」とは、「果てしなく続く想念の乱れ」であるとしたり。それは、「単なる「退屈」や「無聊」「所在なさ」を表わすものでなく、「また島津説のような静かな安定した心境の表現でもあり得ないのであって、やはり、乱れ、迷い、苦悩する心の持続的状态と考えざるを得ない」という。

このように藤田は、後述する私の定義で言えば「煩悶」の意味を見出し、それが「つれづれ」の本義であると述べた。また、これを受けて下房俊一「つれづれ」考——『徒然草』序文の解釈をめぐって——（『国語国文』四六一二、一九七七年）は、さらにいくつかの用例を加えつつ、「つれづれ」とは「世縁にひかれて俗念にまようこと」であり、「求道者にあるまじき煩惱散乱の心」であると結論づけた。

これら二本の論考は、これまで「退屈」説と「新・静寂の境地」説に二分されていた議論に新鮮な風を送りこんだものであり、「つれづれ」の語義に「煩悶」のような例があること

を提示した意味は大きかったが、二つの問題点がある。一つは、中古・中世の用例が全体的に見られていないという点である。たしかに、紹介された用例はこれらの論考の主旨に適當するものであるが、それが「つれづれ」の一般的な意味であるかどうかはまた別だ。いま一つは、ここでの結論が『徒然草』の中の他の用例にも該当するの点という点である。『徒然草』には、全部で八例の「つれづれ」が見られるが、「想念の乱れ」「煩惱散乱の心」というような意味が、それらにも通用するかどうかの検証がないのである。

次に、かめいたかし（亀井孝）「つれづれのころ——老徳散録——」（『むらさき』第二八号、一九九一年）。これは論考というよりも「研究余滴」として載せられた小文である。

亀井は、古辞書類および近世の文学作品に記される「つれづれ」の用例を踏まえつつ、「つれづれ」という言葉の本質は、「たゞひとり」「ひとりぼっち」の意であり、『新撰字鏡』（平安前期）の時代から『にぎはひ草』（近世前期）の時代まで、その「意味論的形態は一貫している」という。「孤独」という意味が、「つれづれ」という言葉の意味の核にあるというのである。そして、次のように言う。

「手もちぶさた」とか「無聊」とかのいゝかえで翻訳する肆意を文脈的にそのかぎりてたゞちに否むつもりはない。

たゞ、作品のあるじ兼好その人のその心情そのものには、別途さらに複雑な屈折矛盾がひそむであろう。

「退屈」という意味を否定するのではなく、そこに「孤独」からくる「複雑な屈折矛盾」を認めること、すなわち意味の幅を広げて考えることを、亀井の小文は提案しているのである。私は、前稿執筆の途中にこの小文の存在を知り、非常に意を強くした。その意味で、着眼点や結論には大いに同意できるのであるが、小文であるがゆえに、用例を挙げて詳細に論じているものではない。その点で、やはり論証としては十分と言わざるをえない。

最後にもう一編、佐々木和夫「つれづれ」考——徒然草序段の解釈について——（『解釈』第三八一号、一九九二年）を挙げよう。佐々木は、『徒然草寿命院抄』に「つれづれ」トハ、サビシキ也」と註されていることを踏まえて、「退屈」説に疑問を呈する。そうして、中古・中世の文学作品の用例を挙げ連ね、「つれづれ」には、「ひとり サビシク」の意が一貫している」とする。問題提起や結論には基本的に同意できるが、やはり小文ということもあろう、先述の諸論とまったく同じ問題点を指摘することができる。用例の挙げ方が恣意的であり、かつ『徒然草』の他の用例への還元が検討されていないのである。

二 前稿の結論

これらの先行研究の問題点を踏まえつつ、私は「つれづれ」をもう一度、自分の手で点検する作業を始めた。まず平安・鎌倉期の代表的な文学作品に見える三八〇例あまりの「つれづれ」を、いちいち文脈に還元して意味を考え直したのである。そうして、私が出した結論は次のとおりだ。

① 「つれづれ」には、基本的に次の二つの意味がある。

A 退屈(行為の欠如感) することがない、手持ち無沙汰だ。

B 寂寥(存在の欠如感) あってほしいもの、いてほしい人が不在で、寂しい。

② また、A・Bのような意味をベースに置きつつ、その気持が連続するさまを表す。この場合、「つれづれとくする」「つれづれにくする」のように助詞を伴って、副詞的に働くことが多い。

C 煩悶(思考の停滞・逡巡) 悶々とした気持ちでくする。

じつは、これらの意味については、たとえば『日本国語大辞典 第二版』(小学館)では、これと似たような分類で――

いやむしろ、品詞ごとに分けてより細かく――記述されている。その限りにおいては、私の再分類は、「退屈(行為の欠如感)」「寂寥(存在の欠如感)」といった概念的な記述を加えたこと以外、特に新しい要素はないのかもしれない。だが、今回私が調査して改めて認識できたこと、そしてそこから新たに推察し得たことは、以下のような事柄である。

③ これまで、「つれづれ」の主要な意味はA(退屈)であるかのように思われてきたが、B(寂寥)やC(煩悶)で解釈しないと意味が通らない用例が、平安・鎌倉期の文学作品のなかには、かなり多い。

④ 現存最古の漢和辞典とされる『新撰字鏡』(平安前期成立)では、「孤独」の意を表わす「儻」という漢字の説明に「つれづれ」という訳語を宛てている。ここから考えれば、「孤独」が「つれづれ」の意味の核であって、そこからB(寂寥)、そしてA(退屈)へと意味が拡張し、さらにC(煩悶)のような意味・用法も派生したのではないか。

たとえば『源氏物語』幻巻に、光源氏が亡き紫の上を思つて「つれづれなるままに」日々を送っているという場面がある。これを型どりに訳せば、「所在なく」「手持ち無沙汰な様子で」といった、「退屈」系の訳となるであろう。たしかに

表面的にはそれでよいかもしれない。しかしここには、たんなる「退屈」では掬い取れない、心の深奥から滲み出るような「寂寥」が、その内面に横たわっていることは明らかである。むしろ、「孤独でさびしい気持ちのままに」などと訳すほうが、より文意に沿った解釈となるであろう。

そのように見てくると、十七世紀の徒然草注釈書が「さびしい」と解釈したのは、「つれづれ」という言葉が持つ、こうした意味のニュアンスを理解しており、「退屈」よりもむしろ「寂寥」にこそ、その意味の重心を置いていたのではないかと考えられる。亀井のいう、「つれづれ」の「意味論的形態の一貫性」である。

これに関連して、十七世紀前半の人々の「つれづれ」理解を示す例を、もう一つ加えておこう。仮名草子『ひそめ草』（正保二年（一六四五）刊）は、その書名からも分かるように、「徒然草」に倣った随筆であるが、その冒頭は以下の文章で始まる。

閑しまひさはいづくも同じ、名だゝるころの夕暮なれば、何となく硯をならし、たゞ言を巨々等筆に任す。（九州大学 雅俗文庫本）

「硯をならし」「たゞ言を」「筆に任す」というような言辭からも、『徒然草』序段を踏まえていることは明らかだが、一方

でこの文章は、良暹「さびしさに宿を立出て眺むればいづくも同じ秋の夕暮れ」（『百人一首』所収）にも拠っている。つまり『ひそめ草』の作者は、「つれづれ」を、「秋の夕暮れ時のさびしさ」（寂寥）に当ててイメージしていたのである。

三 「つれづれ」にもものを書くところ

兼好は序段において、暇ですることがない（退屈）から本書を書き始めたと言っているのか。それとも、孤独でさびしい（寂寥）から本書を書き始めたと言っているのか。

この問題を考えるための一つの材料として、前稿で私は、「つれづれ」にもものを書く（描く）という行為の先例について考えてみた。そのような先例があるならば、兼好がそれに倣ったことは十分にありうるからである。

そこで前稿では、『枕草子』末尾の文章と『源氏物語』須磨巻の用例を挙げた。前者は、里居して「つれづれ」であった清少納言が、『枕草子』を書き始めた理由について語ったもので、この場合の「つれづれ」は、里居という孤独な状況がもたらす「寂寥」と「退屈」、その両方の意味が考えられる、とした。一方、『源氏物語』の用例は、須磨に左遷されて鬱々としている光源氏が、「つれづれ」なるままに絵を描きすさんで

いるという場面であるから、きわめて「寂寥」の意味合いが濃いと判断した。

これらに加えて、次のような例も紹介しておきたい。まずは、『堤中納言物語』の末尾である。人も通えないような場所に籠ってしまおうと決意した人が、「世の中、心細く悲しくて」「うらがなしく思ひつづけられ」て書き送った手紙のなかのひとこと。

つれづれなるままに、よしなしごと、書きつくるなり。
（小学館・新編日本古典文学全集本。以下、本全集所収本は「新編全集本」と略称。傍線は川平。以下同じ）

この一文は、「つれづれなるままに」「よしなしごと」「書きつくる」など、語彙的に『徒然草』序段と非常に近似している。そしてここでの「つれづれ」も、「心細く悲しく」「うらがなしく」思っているのだから、たんなる「退屈」ではない。先に見た『源氏物語』と同様、「寂寥」の気分が濃厚である。次に、藤原俊頼の和歌。『千載和歌集』巻一八・雑歌下には、「堀河院の御時、百首たてまつりける時、述懐の歌よみてたてまつり侍ける」という詞書で、長歌が収められている。その一部を抜き出してみる。

世の中に また何事を み熊野の 浦の浜木綿 重ね
つ、憂きに堪えたる ためしには 鳴尾の松の つれ

づれと いたづら事を かきつめて あはれ知れらん 行
くすえの 人のためには をのづから 偲ばれぬべき 身
なれども （岩波書店・新日本古典文学大系本）

長年、憂さを耐え忍んできた身の習いとして、「つれづれ」と「いたづら事」を「かきつめ」てきた、という。これも『徒然草』序段の言辞に近いものである。ちなみに「かきつむ」とは、「書き集める」の意で、「年ごろ書きつめさせたまひける絵物語など」（『栄花物語』巻二七、新編全集本）、「今更に日に二度三度書きつめつつ、恨みきこえたまふる」（『狭衣物語』巻三、新編全集本）などに見える。

さて、右は述懐の長歌であるから、不遇意識からくる「寂寥」が根底にあり、また「つれづれとくする」という副詞的な用法になっていることを踏まえれば、そのような寂寥がうち続くことによる「煩悶」と見ることができよう。

俊頼が「鳴尾の松」を読み込んだ歌はほかにも、
なるおなる友なき松のつれづれとひとりもくれにたち
けるかな （『歌枕名寄』巻一六、古典文庫本・四四一〇番）

という例がある。鳴尾の松は「友なく」「つれづれ」と、「ひとり」夕暮れに立っている、というのである。ここでの「つれづれ」はより明瞭に、孤独からくる「寂寥」、およびそれが

うち続く「煩悶」を表わしている。鳴尾の松は、「ひとり寂しげに、悶々と立っている」のであって、「ひとり退屈そうに立っている」のではないだろう。上述の長歌における「つれづれ」も、そのイメージで使われているのに相違ない。

こうして見てみると、「つれづれ」にものを書くという先例には、単純に暇を持て余して仕方がないからというよりは、孤独や不遇などの状況からくる寂しさを背景にたたえつつ、それを打ち消すために、という場合が多い。

『徒然草』序段の「つれづれ」に「書く」という行為は、このような先行文学作品のイメージを踏まえた可能性がある。

四 『徒然草』の「つれづれ」

次に考えてみるのは、そもそも兼好は「つれづれ」を、『徒然草』の他の箇所でもどのように使っているか、ということである。それらの用例から、兼好の使う「つれづれ」を、帰納的に考えることができるからである。その意味で、この作業は本テーマの論証のうえでは非常に重要な部分であったが、簡潔を旨とする「新書」としてはあまりに単調で地味な記述になるため、前稿では後ろ髪を引かれつつも割愛したのである。

『徒然草』のなかには、「つれづれ」が全部で八例使われている。序段はひとまず置いて、他の七例を点検してみよう。なお、『徒然草』本文の引用は、角川ソフィア文庫『新版徒然草』（小川剛生注）を用いる。

① 第二段

——同じ気持ちを持った人と、腹を割っていろいろと話せば楽しいだろうと思うが、しかしまったく同じ心の持ち主と語り合ったならば、それは自分と対話しているようなもので、逆につまらないかもしれない。そこで、少しは意見や好みが食いちがう人と、「ああだ、こうだ」と議論するならば、「つれづれ慰まめと思へど」、やはり気心の知れた友達にはかなわない、という。

作者は「つれづれ」を感じている。だが友達と語り合うことによって、それは解消されるだろうと予想しているから、いま彼のそばには、そのような友達がいらない。よって、その状況に焦点を当てれば「寂寥」となるし、そのような状況に気持ち倦んでいると考えれば「退屈」となる。すなわち、ここでいう「つれづれ」は、「退屈」「寂寥」のどちらの要素もあると言える。

② 第一七段

これは非常に短い章段なので、左に全文を掲出する。

山寺にかきこもりて、仏に仕うまるこそ、つれづれもなく、心の濁りも清まる心地すれ。

山寺に参籠して仏事を勤めれば、「つれづれ」にならない、という。仏事が忙しくて暇をかこつような余裕がないというのであれば、「つれづれ」は「退屈」であるし、仏の存在を間近に感じるので孤独ではないというのであれば、「寂寥」にもとれる。①と同じく、どちらとも決しがたく、また両義的な意味を含み込むものかもしれない。^(注)

③ 第一〇四段

順番からいえば第七五段であるが、これは重要なので最後に述べることにして、第一〇四段を先に見ておこう。この段は、王朝物語の習作ともいえるような章段だ。その冒頭部に次のようにある。

荒れたる宿の、人目なきに、女の、憚ることあるころにて、つれづれと籠り居たるを、……

何事か憚りがある事情があつて、女が人けのない粗末な屋敷に「つれづれ」と籠っていたという。これは「退屈」をかこつような、経済的・精神的な余裕のある様子ではなからう。

「人目」のない寂しい環境なのだから、「寂寥」をベースとした悶々鬱々とした状態である。「煩悶」としてよいだろう。

④ 第一三七段

『徒然草』で最も長い章段のなかにある一節である。賀茂の葵祭りを見物に、貴人たちの牛車が次々に参集してくる。

をかしくもきらきらしくも、さまざまに行き交ふ、見るもつれづれならず。

趣味がよいものであったり、華美なものであったり、いろいろな牛車が行き通うのだが、それらを見るのは「つれづれ」ではない、という。「見飽きることがない」の意で取れる。兼好は祭を見に来ているのであるから、そばには人もたくさんいたかもしれず、「寂寥」を感じるような孤独な状況ではない。よつてここは「退屈」に近いだろう。

⑤ 第一七〇段

——人のところへ行つて時間をつぶすのはよくない。人 toward 向き合っていたら、話も長くなり、身もくたびれ、心も閑かではなくなる。だが、

同じ心に向はまほしく思はん人の、つれづれにて、「今しばし。今日は心閑かに」など言はんは、この限りにはあ

らざるべし。

という。気心の知れない人と会うのは、時間と心身の浪費だという考えは、第一二段にも通じる。しかし、同好の士が、「つれづれ」なので、「もう少し話しましょう。今日はごゆっくり」と引き留めてくれた場合は例外だという。この場合の「つれづれ」は、話し相手がいないという状況であるから、「退屈」「寂寥」どちらの意味も含みうる。

⑥ 第一七五段

— 酒は人を狂わせる悪しき飲み物であるが、しかし良い面もある。月の夜、雪の朝、あるいは花の下などでも、穏やかに人と話しながら、盃を取り出して飲むのは、その場に興を添えるものである、という。次の文は、それに続くものである。

つれづれなる日、思ひの外に友の入り来て、とりおこなひたるも、心なくさむ。

「つれづれ」な日に、突然友達がやってきて、酒席の用意をするのも心が慰むものだ、というのであるが、ここでいう「つれづれ」な日とは、どんな日だろう。何もすることがないという側面から見れば「退屈」であろうが、自宅でひとり過ごしていたのであろうから、「寂寥」の気持ちを抱えていたとも

言えよう。やはり両義に取れる用例である。

⑦ 第七五段

最後に、問題の第七五段を見てみよう。本段は冒頭から、次のように書かれる。

つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。まぎるる方なく、ただひとりあるのみこそよけれ。

「つれづれ」をかこつ人は、いったいどんな気持ちなのだろう。ものごとに遮られることなく、たった一人でいることは良いことだ、の意である。

「つれづれ」とは本来、「退屈」だとか「寂寥」だとか、価値としてはマイナスの状態である。しかし、と兼好は言う。それは考えようによっては「まぎるる方なく、ただひとりある」状態であって、プラスの状態と云えるのではないか。それなのに、なぜ人はそれを厭うのか、と。世の中で一般的に行われている価値観や常識を覆す逆説的な論法は、兼好が得意とするところだ。たとえば「花は盛りに、月はくまなきをのみ、見るものは」（第一三七段）、「妻といふものこそ、をのこの持つまじきものなれ」（第一九〇段）など。

たしかに、ここで兼好は「つれづれ」なる状態を肯定している。そして十七世紀の注釈書の「静寂の境地」説（前稿第

一章)、あるいは大正期以降の「新・静寂の境地」説(同・終章)などは、この一つの用例を過大評価して、これこそが兼好の「つれづれ」の真意だ、などとして、序段を含む他の七例すべてを、このようなプラスの意味で捉えようとした。

だが前稿で述べたように、上の兼好の発言は、少し奇を街った逆説的な議論なのであって、それを兼好独自の「つれづれ」として、全用例に適用するのは無理がある。 「つれづれ」とは、兼好においてもやはり、基本的には忌むべき状態なのであって、この段の「つれづれ」も、「退屈」や「寂寥」といった一般的な意味範囲を出ない。そのようなマイナスの状態ではあるが、それをどう捉え直せるかという議論が、この段でなされたと考えるのが妥当だろう。

こうして見てくると、序段を除く、『徒然草』のなかの「つれづれ」七例の内訳は、「退屈」と捉えられるもの一例、「退屈」とも「寂寥」とも捉えられるもの五例、「寂寥」からくる「煩悶」と捉えられるもの一例となる。すなわち、単純な「退屈」の例はわずかに一例のみであり、残りの六例は、「寂寥」の可能性があるもの、あるいは「寂寥」のニュアンスを強く含むものということになる。

これに、先述のような「つれづれ」にものを「書く」という類型の問題を併せて考えてみるならば、序段の「つれづれ」

は、やはり単純な「退屈」とは考え難い。まさしくそれは、前稿第一章第一節のタイトルに示したとおり、「退屈」と「寂寥」のあいだ」にその真意があるというべきである。

「所在ない」「手持ち無沙汰だ」というような、定型的な「退屈」系の解釈にしがみつかず、適宜このような「寂寥」のニュアンスを擲い上げつつ解釈することが、兼好の「つれづれ」——そしてそれは、広く古典文学における「つれづれ」という問題に広げても、大きくを外すまい——を考える際の要諦となるのではなからうか。

五 十八世紀の「つれづれ」語釈

以下は、「補説」(本稿)の補説のようなものである。

一つめは、「つれづれ」の語釈史の変遷についてである。現在は「退屈」系が主流であるが、前稿にも書いたように、十七世紀は「寂寥」系が主流であった。いつからその流れが変わったのであろうか。

たとえば十七世紀の語源辞典である、松永貞徳の『和句解』(寛文二年(一六六二)刊)には、次のようにある。

徒然 つれづれ。情つらさより出づ。さびしきのかへ詞也。ひとり居て、つらつら物を思ふ体也。(『松永貞徳』和句

解』本文と研究」、土井文人編、和泉書院、二〇一五年)

ここからは様々な情報が読み取れるのであるが、いまは「つれづれ」が、「さびし」という言葉で言い換えられると説明している点だけに注目しておきたい。そしてそれは、「ひとり居て、つらつら物を思ふ体」であるというのであるから、ここでいう「つれづれ／さびし」は、「寂寥」の意に重点があると見える。

これに対して、たとえば十八世紀後半の『源氏物語』語彙辞典である、五井蘭洲の『源語梯』(天明四年(一七八四)刊)では、「つれづれ」をやはり「さびし」と同じ意味であるとして、つ、つらねつらね物を思ひつつ居るは、暇ありてわざなき時

のことなれば、さびしき意にも言へるなるべし。(国文学研究資料館初雁文庫蔵本)

と説明している。ここでいう「つれづれ／さびし」は、「暇ありてわざなき時のこと」であるというから、「退屈」の意に重点があるだろう。

このように、同じく「つれづれ」と「さびし」は同義であると説明しつつも、十七世紀前半の「さびし」の捉え方と、十八世紀後半のそれとは、そこに認定する意味合いが微妙に異なっている。そしてそれは、「つれづれ」をどう捉えるか

——「寂寥」なのか「退屈」なのか——という問題にもつながっているのである。

この問題について、参考となる発言をしているのは、本居宣長である。『源氏物語玉の小櫛』(寛政十一年(一七九九)刊)巻五において、「さうぐし」は「さびしき也」という契沖『源註拾遺』の解説に同意しつつ、次のように付け加えている。

さて「つれづれ」といふも、さびしきことなるを、同じさびしきも、「つれづれ」と「さうぐし」とは意異也。「つれづれ」とは、すべきわざのなくて、ひまにてさびしきをいひ、「さうぐし」とは、あるべき物あるべき事もなく、たらぬがさびしきをいへり。此けぢめを心得おくべし。(『本居宣長全集』第四卷、筑摩書房、一九六九年)

このように宣長は、「つれづれ」と「さうぐし」を対照させて、両者は同じく「さびし」の意味であるが、「つれづれ」とは「すべきわざのなくて、ひまにてさびしき」「さうぐし」は「あるべき事のなくて、たらぬがさびしき」を言うとして解説する。すなわち、「つれづれ」は「退屈」(行為の欠如感)、「さうぐし」は「寂寥」(存在の欠如感)であると定義するのである。

これは一見、同系列の言葉の微妙な違いを捉えた、たいへん明解な定義のように思える。しかし、「つれづれ」のなかにも「寂寥」の意味があること——いな、むしろそちらこそがこの言葉の核心に近かろうこと——は前述したとおりであつて、この宣長の定義は失考と言わざるをえない。

たとえば『大鏡』の冒頭に、雲林院の菩提講を聴聞に来た人々が、講師の到着を待っている場面があるが、そこには、かくて講師待つほどに、我も人もひさしくつれづれなるに、この翁どもの言うやう、「いで、さうざうしきに、……（新編全集本）

とある。この「つれづれ」は「退屈」の意で解釈できるものであるが、それはすぐ後で「さうざうし」とも言い換えられているのである。この例をもつてしても、宣長の定義のように明解に分類できないことは明らかである。

とはいえ、このような「つれづれ」理解はこれ以後も広まっていたようで、たとえば前稿で示したように、宣長の弟子である鈴木木朗の『雅語訳解』（文政四年（一八二二）刊）には、「つれづれ」≡「タイクツ」という説明が、明確になされる。「つれづれ」のなかに含まれていた「寂寥」の意味はこうして忘れ去られ、「退屈」の意味に偏った理解が主流となつていく。そしてそれは、現代にまで影響を及ぼしているのである。^(注)

六 「つれづれ」と「徒然」

「補説」の補説、二つめは、コラムに記した和語「つれづれ」と漢語「徒然」^{とぜん}との関係についてである。前稿では、次のようなこと記した。

① 「つれづれ」は「さびしさ」、「徒然」^{とぜん}は「むなしさ」に、その意味の重点があつたが、意味に重なる部分もあつたため、平安末期までには「つれづれ≡徒然」^{とぜん}という認識が生まれた。

② 「つれづれ」は和文系資料、「徒然」^{とぜん}は漢文系資料で主に使われているが、後者は少なくとも室町時代には、「とぜん」という口語としても使われた。

③ 「つれづれ草」を「徒然草」と表記する慣例が定着するのは、近世以後である。

このなかで特に興味深いのは、③の事実である。①に記したように、「つれづれ≡徒然」^{とぜん}という認識は平安時代から存在した。しかし、それなのに「つれづれ草」≡「徒然草」と表記する慣例がしばらく定着しなかったのは、「つれづれ」と「徒然」^{とぜん}との間にある本来のニュアンスの違いが、やはり意識されていたのではないか——。前稿ではそのようなことを指

摘した。このことを裏付ける発言を、二例紹介しておく。

まず、国学の祖とも言われる契沖の見解。徒然草注釈書『鉄槌』（慶安元年（一六四八）刊）に、契沖が書入れをした本が水戸彰考館に伝存している。その序段注釈の部分には、次のような書入れが見られる。

諺に、「徒然」とはいへど、「徒然」は「黙然」とおなじ。「つれづれ」とは少心かはれり。いまだ「つれづれ」といふ正字をしらず。「寂寞」の字なるべき歟。（『契沖全集』

第一六巻、岩波書店、一九七六年）

俗に「徒然」という言葉があるけれど、「徒然」は「黙然」（だまつていること）であり、「つれづれ」とは少し意味が違う。「つれづれ」に漢字を宛てるとすれば、「寂寞」が適当だろうか——と。「徒然」よりも「寂寞」の方が近いとする点で、「つれづれ」のニュアンスを知るうえで貴重な証言である。

次に、近世初期の儒学者として著名な堀杏庵の三男で、名古屋藩儒となった堀孤山の随筆『本朝鶴林玉露』（近世前期成・写）。その第三巻一三に、「徒然」と題する文章がある。原漢文であるが、書き下しで記す。なお本資料の存在については、沐海宇氏のご教示を得た。

静居無事の日、只徒然として白日を送る、世の諺にこれ

を「徒然」と曰ふ。吉田の兼好法師、世を遁れて書を作るに及んで、これを名づけて「徒然」と曰ふ。これより世人、猶もつて静居無事の日を謂ひて「徒然」と曰ふ。

（刈谷市中央図書館村上文庫蔵）

孤山が言わんとするところは、少し分かりづらい。よつて適宜言葉を言い換えたり、補ったりしながら現代語訳してみよう。

「静居無事の日」（静かに暮らし、とりたてて事もないうちに、「徒然」として（むなしく）昼間を過ごす——これを世俗の言葉に「徒然」という（本来「徒然」は「むなし」のよいうな意味しか持たないが、世俗では「静居無事の日」のような意味で使われているということ）。また、兼好法師は世を遁れて著述をものし、これを「徒然」と表記した。以来、世間の人はよりいっそう、「静居無事の日」のことを「徒然」と言うようになった——。だいたいこのようなことを言っているのだろう。

孤山は、『徒然草』が兼好の時代から「徒然草」という書名表記がなされていたと認識しているようであるが、先述のとおり、室町時代には「つれづれ草」と表記されていたので、これは誤解である。ともあれ、「徒然」の本来の意味が「静居無事の日」ではないと指摘している点は、「つれづれ」と「徒

然^ぜ」の本来的な意味の違いを考えるうえで、少しく参考となるであろう。

おわりに

最後に、お詫びというか釈明として記しておきたいのは、小川剛生注『新版徒然草』（角川ソフィア文庫、二〇一五年、以下「小川注」と前稿との関係である）。

小川注は、序段の「つれづれなるままに」を、「なすこともなくまた話し相手もない状態」（傍点は川平、以下同じ）と注し、また「無聊孤独であるのに任せて」と現代語訳している。おそらくこれは、「つれづれ」という言葉の核にある「孤独」の意味を踏まえたものであり、前稿と論点を共有している部分があると思われる。つまり、私が上述の論証過程で達した結論は、小川注が注釈として、あるいは現代語訳として、すでに簡略ながら示していたということになる。

しかるに私は前稿第一章において、この小川注の存在を知りつつも、それを紹介しなかった。その理由は以下のとおりである。

じつは私は、小川注が刊行される以前に、本章の基になった文章をすでに公表していた（「つれづれ」とは何か——『徒

然草』の転変——）、『テキストの誘惑 フィロロジの射程』所収、九州大学出版会、二〇一二年）。そこでその内容を基本的に継承するかたちで、前稿を書いたのだった。このとき、自説のプライオリティを説明しつつ、小川注を新たに組み込んで、論を再構成するのが理想ではあったのだが、時間と力量の不足から、私にはそれがうまくできなかった。

そのために、研究者の方々には、やや不審感を抱かせる結果になってしまったかもしれない。小川氏にはこの点について、すでに私信において釈明申し上げたが、ここでもその事情を明記して、広く諸賢のご理解を得たいと思った次第である。

注

注1

なおここには、『源氏物語』賢木巻に、雲林院に参籠している光源氏の様子を語って、「この方（＝雲林院）のいとなみは、この世もつれづれならず、後の世は頼もしげなり」とあるのが念頭にあったのかもしれない。この参籠は、源氏が藤壺のことを「人わろく、つれづれに思され」ていた、すなわち人目にも見苦しいほどに、悶々と思いついていたのを解消するために行ったものであり、それを受けての上記の文章である。それを踏まえれば、上の「この世もつれづれならず」は、「現世における（そのような）煩悶もなく」の意で解釈できる。

したがって、この『源氏物語』の文章を介在しているとすれ

である。

(かわひら としふみ・九州大学大学院准教授)

注2

ば、『徒然草』第一七段の「つれづれ」は、何らかの思い煩い、すなわち「煩悶」の意で取ることも可能となる。ただし『源氏物語』と比較した場合、その煩悶の具体的要因が推測できず、やや唐突で不自然な印象が残る。

井手恒雄は「つれづれ」の意味(『文芸と思想』第二七号、一九六五年)において、「つれづれわぶる」の部分で、「つれづれ(を)わぶる」ではなく、「つれづれ(なりと)わぶる」と解釈する。井手の論考のなかで、この部分は最もスリリングで、かつこの論考全体の要諦となる部分であるが、しかしそのように考えるには、構文的に無理がある。なぜなら、ここは冒頭の一文であり、何を「つれづれ」だと「わぶる」のか、その目的語の部分が先に立たないと、きわめて不自然だからである。したがって、ここはやはり「つれづれ(を)わぶる」と解釈するしかないと考ええる。

注3

「つれづれ」＝「退屈」という、現代主流の『徒然草』序段解釈を決定づけたのは、注2に掲載した井手恒雄の論考、および同氏「つれづれ」の誤解(『徒然草通説批判』所収、世界書院、一九六九年)ではなからうか。井手は序段を、「これは私が退屈しのに書いた、物狂おしき文章です」という予防線を張って、読者の批判を回避しようとしたとする。もちろん、兼好が本当に「退屈」していたかどうかは別問題で、彼は謙辞として、そのように言っているというのである。

当然も、この序段が謙辞を述べているということについては異論ない。しかし、だからといって、ここを「退屈」の意に限定する必要はないであろう。「退屈」であろうが「寂寥」であろうが、いずれにしろ、そのようなマイナスの状態の折に書いた物狂おしき文章です、という謙辞と捉えればよいという立場